

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月1日現在

機関番号：26401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2011

課題番号：22720195

研究課題名（和文）英語における事象を修飾する形容詞の意味的特徴について

研究課題名（英文）Semantic Properties of Adjectives Modifying Events in English

研究代表者

金澤 俊吾 (KANAZAWA SHUNGO)

高知県立大学・文化学部・准教授

研究者番号：70341724

研究成果の概要（和文）：英語には、一定の統語形式[NP-V-a/one's-A-N]をとりながら、様々な意味を表すことができる。本研究は、軽動詞 have を伴う Have a 構文と、同族目的語構文、転移修飾表現、形容詞を伴う Way 構文を考察の対象とし、それぞれの意味的特徴を検証し、各構文、現象間の意味関係を明らかにすることを目標とする。本研究により、これら4つの構文、現象において、形容詞が名詞を修飾するという限定用法の関係が成立しており、その関係は、特殊な関係ではなく、英語の文法体系に組み込まれるべき関係であると結論づけられる。

研究成果の概要（英文）：In English, the fixed syntactic string, [NP-V-a/one's-A-N], has various meanings. The following instances are made up of this syntactic string: *Have a* constructions, cognate object constructions, transferred epithets, and *Way* constructions where an adjective modifies *one's way*. I will examine the semantic properties of these four instances in detail, and then explore their semantic networks. The conclusion of this study is twofold. First, what is in common with these four instances is that an adjective modifies an event denoted by an object NP of the verb. Secondly, these modification relations are normal in that an adjective modifies its following noun, and thus these relations should be listed in the system of the grammar in English.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：意味論、形容詞、事象、意味拡張、構文

## 1. 研究開始当初の背景

## (1)研究の理論的背景

これまでの英語学研究の中で、1980年代、1990年代、意味論の研究領域において、英語の動詞の語彙的意味を検証することに研究

の関心が置かれてきた。Jackendoff や Levin and Rappaport に代表される語彙意味論 (Lexical Semantics)、Lakoff や Langacker に代表される認知意味論 (Cognitive Semantics)、Goldberg に代表される構文意味論

(Construction Grammar)が代表的である。これら一連の研究を基盤にして、意味理論が飛躍的な発展を遂げてきたのは言うまでもない。さらに、2000年以降、研究の関心事が、動詞の語彙的意味だけではなく、Boas や Kennedy, Paradis に代表されるように、形容詞の語彙的意味にも関心が向けられてきた。この研究の進展に伴い、形容詞が関わる英語の諸構文の意味的特徴についても研究が進められてきている。

## (2) 先行研究における3つの問題

先行研究において、解決すべき次の3つの問題が残されている。

- ① 英語の諸構文を形成する、要素間の語彙的意味の相互関係が考慮されていない。
- ② 英語の各構文が固有に持っている意味と、その構文を構成している各要素の語彙的意味の整合性が検証されていない。
- ③ 同じ統語形式でありながら、意味が異なる各構文の意味的関係を体系的に捉えられていない。

①と②の問題に関して、先行研究では、英語の動詞もしくは形容詞のそれぞれの語彙的意味に基づいて、英語の諸構文に当該の語が、生起できるか、できないか、二分法に基づいて分析されてきた。しかしながら、英語の動詞、形容詞が、それぞれ当該構文に生じた際、共起する他の要素と図られる意味的融合や修飾関係に関しては十分に検証されていない。

また、③の問題に関して、これまで、構文、現象毎の記述的、理論的一般化を図る試みはなされてきている。しかし、同じ統語配列から構成され、かつ、意味がそれぞれ異なる構文間にみられる意味関係を考慮していない。それが原因で、先行研究においてなされてきた一般化は、個々の構文、現象を説明するものにとどまり、拡がりが見られない。その結果、英語の同じ統語配列にみられる、意味的な類似性、普遍性を捉えられないままに研究が進められている。こうして、記述的にも理論的にも一般化が十分に行われているとは言えない状況にある。

## 2. 研究の目的

### (1) 本研究で明らかにすること

本研究では、英語の一定の統語配列 [NP-V-a/one's-A-N] から成り、形容詞(A)が目的語名詞(N)を修飾する現象を考察する。特に、形式的には形容詞が目的語名詞を修飾しながら、意味的には事象全体を修飾する英

語の4つの構文、現象にそれぞれみられる意味的特徴を検証する。そして、[NP-V-a/one's-A-N]から構成されるパターンが固有に表しうる意味に関する一般化を図る。そして、最終的には、典型性を示すパターンから周辺的なパターンに至るまで、いわゆる他動詞文の英語の構文の意味拡張の中に、これら一連の構文、現象がそれぞれ位置づけられることを明らかにする。

### (2) 本研究で扱う構文および現象

本研究では次の4つの構文および現象を扱うこととする。

- ① Have a 構文  
(John had a quick drink.)
- ② 同族目的語構文  
(Mary lived a happy life.)
- ③ 転移修飾表現  
(John drank a quick beer./ John ate a happy hamburger.)
- ④ 形容詞を伴う Way 構文  
(He made his weary way to bed at 2.30 in the morning.)

①の Have a 構文が、形式的にも意味的にも最も修飾関係に整合性がみられ、典型性がみられる構文である。①には事象の推移の速さを表す形容詞 (slow, fast, quick, ...) が典型的に現れ、事象全体を修飾する。

次いで典型性を示す構文が、②の同族目的語構文である。この構文は、形容詞が、目的語名詞の事象全体を修飾する点において、①の意味的特徴を継承している。しかし、①とは異なり、本来自動詞である動詞が、目的語として、動詞と「同族の」名詞を取り、形容詞が義務的に生起する点において、違いがみられる。また、Aの位置には、感情を表す形容詞が生起する。

そして、転移修飾表現を伴う③のパターンになると、形容詞が普通名詞を修飾しながら、意味的には、普通名詞が関与する事象を修飾する。そして、転移修飾語として機能する形容詞は、①と同様に速さを表す形容詞、②と同様に感情を表す形容詞、どちらも生起できる。また、この転移修飾表現には、典型的には、目的語名詞と最も結びつきの強い動詞が V の位置に動詞として具現化されるという特徴がみられる。

④の形容詞を伴う Way 構文では、速さや感情を表す形容詞に加えて、主語名詞の状態を表す形容詞も生起する。また、先の3つの構文、現象とは異なり、目的語名詞の限定詞が主語と同一指示の代名詞 one's である。この場合も、事象全体を修飾する点において、①～③にみられる意味的特徴を継承している。

このように、[NP-V-a/one's-A-N]から構成される統語配列において、Have a 構文にみられる事象名詞を修飾するパターンを基本型として考えると、意味拡張が進むにつれて、生起する動詞や、目的語名詞の位置に生起する名詞の種類が、動詞と「同族の」名詞、普通名詞、one's way と変わっても、形容詞が、事象を修飾するという基本的な修飾関係が保持されていることが分かる。また、意味拡張が進むにつれて、各構文、現象にそれぞれ生起できる要素にも意味的な広がりがみられる。例えば、転移修飾表現を含む文には、速さを表す形容詞、感情を表す形容詞も生起する。また、Way 構文には、主語名詞の状態や移動に付随する動作をはじめとする様々な形容詞が生起する。

### 3. 研究の方法

(1)コーパスを用いて当該構文、現象のデータを収集し、意味的特徴に関する記述的一般化を図る。

英語の4つの英語の構文、現象内の[a/one's-A-N]から成る名詞句内にみられる修飾・被修飾の関係について検証する。そして、当該名詞句と共起する他の要素（主語名詞、動詞など）との意味的關係を明らかにする。その上で、各構文が固有に持っている構文的意味との整合性を検証する。

(2)各構文、現象間にみられる意味拡張を検証し、[NP-V-a/one's-A-N]から成る構文の意味拡張の一般化を提示する。

各構文、現象間にみられる意味的特徴を基にして、当該構文、現象間にみられる意味拡張を検証する。その上で、英語の形容詞が、事象を修飾する際にみられる形式と意味との対応関係に関して記述的一般化を提示する。

本研究では、形容詞が事象を修飾する際に最も基本的な構文は、Have a 構文であると考え。そして、この構文を基にして、同族目的語構文、転移修飾表現、Way 構文へと意味拡張が進むものとする。一定の統語配列[NP-V-a/one's-A-N]が固有に持つ意味を明らかにする。

これら一連の構文、現象の意味拡張を考えるにあたり、特に次の点に注目する。

①形容詞の修飾関係を結ぶ名詞の多様性について検証する。(特に同族目的語構文、転移修飾表現、Way 構文に関して)

・意味拡張が進むにつれて、形容詞は当該構文・現象の中で、事象以外に、何を修飾対象とするのか。

・どのような意味内容の形容詞が生起するのか。  
・これらについて、各構文、現象の固有の意味との整合性を検討する。

②形容詞と目的語名詞との間にみられる意味関係が、共起する動詞の分布に及ぼす影響を検証する。(特に転移修飾表現、Way 構文に関して)

・生起する形容詞の分布と、その修飾対象とされる名詞との修飾関係が、共起する動詞の分布に対して、意味的にどのような影響を与えるのか。  
・どのような相関関係がみられるのか。  
・[a/one's-A-N]から成る名詞句にみられる一般的な意味的制約として考察する。

③形容詞が事象を修飾する修飾関係は、英語の文法体系に組み込まれるべき修飾関係であることを示す。

・形容詞が事象を修飾する際、本研究で扱う構文、現象において、形容詞は、いずれも、形式的にも意味的にも後続する名詞を修飾することを示す。  
・この修飾関係は、英語の限定用法の形容詞の修飾の仕方に基づいており、特殊な修飾関係ではないことを示す。  
・当該構文、現象にみられる一定の統語配列[a/one's-A-N]にみられる意味的特徴が、構文、現象を構成している他の要素（動詞、主語名詞）の共起関係に課せられる意味的制約が統一的に説明されることを示す。

### 4. 研究成果

本研究1年目の平成22年度は、軽動詞 have を伴う Have a 構文の意味拡張について検証した。事象を修飾する形容詞 quick, hasty, hurried の3つの形容詞を取り上げて、事象名詞を修飾する場合と、普通名詞を修飾の場合に、それぞれみられる修飾のメカニズムを検証した。これら3つの形容詞は、事象の時間的推移の速さを表す点において、意味的に類似していながら、後続する名詞との修飾関係をみると分布に違いがみられることを明らかにした。

事象名詞の場合、普通名詞の場合、いずれの場合も[NP-V-a/one's-A-N]から成る統語形式を共有している点に着目し、事象名詞の修飾のパターンから、普通名詞のパターンに意味拡張を経て、形成されることを提案した。

そして、これら一連の形容詞が普通名詞を修飾する際、形式的には普通名詞を修飾していながら、意味的には事象を修飾する「形式と意味のズレ」がみられる。このズレを解消するために、Vのスロットを満たす動詞の語

彙情報が、事象修飾を実現するための意味情報を提供する役割を果たすことを明らかにした。

この結果に基づき、*hasty*, *hurried* は、事象名詞を修飾するパターンよりも、修飾対象が普通名詞を修飾するパターンの頻度が高い理由を明らかにした。

また、*Have a* 構文にみられる形容詞と事象名詞との分布と、同族目的語構文にみられる形容詞と、動詞の同族目的語との分布にはそれぞれ違いがみられることを明らかにした。

本研究 2 年目にあたる平成 23 年度は、軽動詞 *have* を伴う *Have a* 構文と、形容詞が生起する *Way* 構文に関する意味的特徴を検証した。先行研究において、*Have a* 構文は、「事象が非有界的(*unbounded*)でなくてはならない」と主張されてきた。本研究では、必ずしもこの制約が適用されない事例があることを指摘し、*have a walk* に関して有界性が指定される必要があることを主張した。その指定のされ方は、2 つのパターン(語彙的に有界性が決定されるパターンと、文脈から有界性が決定されるパターン)に大別され、最終的には 3 つの下位パターンに分類されることを提案した。当該構文と意味的整合性が取りやすい主語名詞の「楽しい」感情を表す形容詞だけではなく、主語名詞のその他の心理状態、一時的状態、動作の速さ、動作の状況を表す形容詞がそれぞれ生起できることを示した。

また、形容詞が *one's way* を修飾する *Way* 構文のうち、*walk one's way* の意味的特徴について考察した。*walk one's way* は、*walk* の語彙的性質に基づき、[*one's way*], [*one's way-PP*] が、それぞれ主語の指示対象が移動する経路を表すと考え、*walk* の語彙的性質から合成的に(*compositional*)形成されることを提案した。これにより、前置詞句を伴わない *walk one's way* が容認される事実に対し、*walk* の語彙的性質から合成的に決定されるパターンであり、経路の移動が前景化される現象であることを示した。とりわけ、*one's way* を修飾する形容詞が生起する際に、この傾向が強くみられる。この事実に対して、経路の移動の過程および形容詞が表す主語名詞の状態が、同一の時間軸を共有し、歩く過程と主語名詞の状態が前景化されるのに伴い、終点を示す前置詞句が生起しにくくなることを示した。

いずれの現象においても、形容詞は、事象名詞 *walk*, 名詞句 *one's way* から、それぞれ喚起される動作や動作を行う人の心理状態、一時的状態を表す。この修飾関係は、当該表現に固有にみられる特殊な関係ではなく、限定用法の形容詞の修飾の仕方の 1 つであり、英文法の体系に組み込まれるべき関係であることを明らかにした。

さらに、*Way* 構文については、形容詞と共

起する動詞の相関性についても検証した。*Way* 構文は構文固有の意味として、動詞が移動の手段を表す場合、「行為の困難性」がみられる。特に *laborious* などの形容詞が *one's way* を修飾する時、当該構文を形成する基本的な動詞である *make* と共起する事例が多い傾向にあることを示した。また、*weary* などの一時的な身体状態を表す形容詞が *one's way* を修飾する場合には、*make* だけではなく、他の移動を表す動詞も共起できるようになる。こうして、形容詞と後続する名詞との修飾関係が、*Way* 構文を構成する要素、とりわけ動詞の分布に影響を与えていることは明らかである。

本研究では、語彙意味論、認知言語学、それぞれの研究分野における知見を応用し、[*NP-V-a/one's-A-N*]において、語彙的に修飾関係が成立するパターンから、文脈の中で修飾関係が成立するパターンに至るまで、その修飾関係には多様性がみられることを明らかにした。そして、*Have a* 構文を、事象修飾を表す構文の基本型として考えると、[*NP-V-a/one's-A-N*]から構成される構文の意味拡張が進み、修飾対象となる名詞や生起する動詞が変化しても、「形容詞が事象を修飾する」関係は保持される。

また、[*NP-V-a/one's-A-N*]から構成される構文の意味拡張が進み、形式的には普通名詞を修飾し、意味的には、普通名詞の内部構造に指定される事象を修飾しても、「形容詞が後続する名詞を修飾する」関係は保持される。つまり、形容詞が事象を修飾する場合にも、一般原則「限定用法の形容詞は、後続する名詞を修飾する」に従っており、英語の文法体系に組み込まれるべき修飾関係の 1 つであり、特殊な修飾関係ではないことを明らかにした。

本研究から、「修飾対象が事象である点において、形容詞と副詞との間には類似性がみられるものの、修飾対象には違いがみられ、形容詞と副詞の意味機能が異なる」という帰結が得られる。この形容詞と副詞の意味機能の違いは、基本原則「形式が異なれば、意味が異なる」に従っていると言える。

①～④の構文、現象にそれぞれ生起する形容詞は、先行研究においては、対応する様態の副詞に書き換えられ、同義であると分析されてきた。しかしながら、本研究の分析に従うと、当該形容詞は、形式的にも意味的にも事象全体を修飾することが第一義的(*primary*)であり、それに伴う、主語名詞の状態、動作の様態は副次的(*secondary*)である。一方、副詞は、動作の動きを修飾する様態の解釈が第一義的であり、主語名詞の状態や事象全体を修飾する解釈は、副次的である。

最後に今後の課題について述べる。本研究では、[*NP-V-a/one's-A-N*]から構成される形容

詞と名詞との間にみられる修飾関係によって、共起する動詞の分布が決定されることをみてきた。

一方で、walk one's wayのように動詞の語彙情報から合成的に決定される修飾関係や、同族目的語構文のように、動詞の語彙の意味によって、形容詞と同族目的語との修飾関係が決定される場合もある。

これら4つの現象にみられる、この形成のされ方の違いが、各構文、現象の分布に及ぼす影響に関して、さらに精査する必要がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①金澤俊吾、「Have a 構文にみられる意味的性質について—Have a walk を中心に—」、『言語におけるミスマッチ (仮題)』菊地朗、小川芳樹、西田光一 (編)、東北大学大学院情報科学研究科、査読無、印刷中。
- ②金澤俊吾、「Way 構文における形容詞の意味的性質に関する一考察」、『言語類型の記述的・理論的研究』秋孝道 (編)、新潟大学人文学部、査読無、2012年、pp.27-40。
- ③金澤俊吾、「英語における名詞と形容詞との修飾関係に関する一考察」、『高知女子大学紀要 文化学部編』、60巻、2011年、pp.1-12。

[学会発表] (計3件)

- ①金澤俊吾、「転移修飾表現にみられる修飾関係について」、平成23年度第3回科学研究費補助金(基盤研究(B))「高機能インターフェイスを備えたデジタルディケンズレキシコンとその活用研究」研究会 Dickens Lexicon、2012年3月20日、高知県立大学。
- ②金澤俊吾、「Way 構文における修飾表現の意味機能について」、英語語法文法学会第19回大会、2011年10月15日、奈良女子大学。
- ③金澤俊吾、「事象を修飾する形容詞が関わる構文の意味的性質について」、東北大学大学院情報科学研究科公開ワークショップ「言語におけるミスマッチ」、2011年9月17日、東北大学。

[その他]

(招待講義)

- ①金澤俊吾、「英語における形容詞の修飾について—転移修飾語のしくみ—」、京都外国語大学 Mebius Summer Session 2010、2010年9月13日、京都セミナーハウス。

(書評)

- ①金澤俊吾、「アリス・ダイグナン著、渡辺秀樹、大森文子、加野まきみ、小塚良孝訳(2010)『コーパスを活用した認知言語学』、「英語コーパス学会 Newsletter」、72号、2011年、pp.4-7。

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

金澤 俊吾 (KANAZAWA SHUNGO)

高知県立大学・文化学部・准教授

研究者番号：70341724